

令和元年6月25日現在

機関番号：32604

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K16098

研究課題名（和文）「語り」の蓄積からコミュニティの物語を出力する地域デジタルアーカイブの構築と運用

研究課題名（英文）Community Digital Archive from "Voice" of inhabitants

研究代表者

松本 早野香 (Matsumoto, Sayaka)

大妻女子大学・社会情報学部・講師

研究者番号：90575549

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地域コミュニティでの「語り」に着目したアーカイブを構築することにより、地域における情報技術の新しいモデルを研究するものであった。具体的には、地域住民が多数出演した宮城県亘理郡山元町「りんごラジオ」の放送記録をデジタル化し、これを中心としたアーカイブシステムを構築、復興記録の地域における活用について調査した。それらの結果から、東日本大震災後に運営が長期化した臨時災害放送局のメディアとしての位置づけなどについて考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

災害後の復興記録を地域において生かす手段としてのデジタルアーカイブを提案した。放送記録の分析により、大規模災害後にどのような情報が必要とされるかを明らかにした。災害直後から長期的な復興期に至るまで、時期ごとに地域においてどのような情報が求められるかを示した。東日本大震災後に多く設立され、運営が長期化し、その後の災害でもしばしば設立されている臨時災害放送局について、地域メディアとしての位置づけを考察した。

研究成果の概要（英文）：In this project, I suggested a new type of archive and considered inflection of the information technology in the local community. I computerized the record of an extraordinary disaster broadcasting stations "RINGO RADIO". RINGO RADIO is established for the revival from East Japan great earthquake disaster in Yamamoto town Miyagi Prefecture. A large number of area inhabitants appeared in the broadcasting station. I computerized the broadcast record and I made the archive for the broadcast record. I carried out investigations to utilize the record in the local community.

研究分野：社会情報学

キーワード：アーカイブ 地域 臨時災害放送局 東日本大震災 山元町 りんごラジオ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究を開始した 2015 年当初は東日本大震災から 4 年が経過し、復興が進む一方で、地域コミュニティに対する震災の長期的な影響も指摘される時期であった。筆者は 2011 年 4 月末から、被害甚大であった宮城県亘理郡山元町で復興支援に参画し、その過程で激甚災害後の地域コミュニティの復興に対する情報技術の役割について考察した。これらの背景から、地域コミュニティの復興には地域の記録・個人の記録が寄与すると仮定し、東日本大震災後 10 日で閉局し放送を継続していた山元町臨時災害放送局「りんごラジオ」(2017 年 3 月閉局)の持つ記録を対象としてデジタルアーカイブを構築する研究の計画に至った。

2. 研究の目的

本研究では、地域コミュニティに属する人の「語り」に着目し、これを蓄積し、ユーザの操作によって出力し、いわば「コミュニティの物語」を提供する新しいタイプの地域アーカイブを構築することを目的とした。さらに、これによって、地域における情報技術の活用に新しいモデルを提案するとともに、地域コミュニティにおける「語り」の果たしうる役割を考察するものであった。対象となる地域は可住面積の 6 割が東日本大震災の津波被害をうけた宮城県亘理郡山元町であった。この町の臨時災害放送局「りんごラジオ」は町内を取材したオリジナル番組を長期にわたってほぼ毎日放送する局であった。出演した町民は累計 3000 人を越え、地域コミュニティ内の「声」が主たる放送であったと考えられた。その放送記録は復興の記録でもあり、地域におおいに貢献しうると期待された。しかしながら、放送の記録はデジタル化されていないものも多く、連結されることなく独立して存在していた。そこで本研究では、人々の「語り」を中心として関連情報を結びつけることができるデジタルアーカイブを構築することをめざした。

3. 研究の方法

第一に、デジタル化されていないものを含め、臨時災害放送局「りんごラジオ」にどのような記録があるかを調査した。ラジオ局長・高橋厚、局長代行・高橋真理子より、記録の閲覧、複写、局内の立ち入り調査等への協力を得て実施した。また、ラジオ局関係者や地域住民に対する聞き取り調査を実施し、地域コミュニティの記録やコミュニティの人々の語りに対する思いを聴取した。

第二に、この調査で得た手書きのノートなどアナログデータをデジタル化し、ウェブシステムによるアーカイブに搭載した。このとき、聞き取り調査の結果から、地域の記録が利用される場面と閲覧の形式を想定し、アーカイブの設計に反映した。また、研究代表者が開設を支援し放送局によって放送期間中更新されていたブログを保全し、アーカイブに結びつけるものとした。アーカイブはその性質上、常時公開はしないものとした。

第三に、放送記録の内容を時系列で分析し、東日本大震災直後の混乱した時期から復興期に至るまで、いつどのような情報が必要とされたかを示した。また、それをおして、東日本大震災後に長期的な運営が定着した臨時災害放送局の地域メディアとしての位置づけをおこない、その役割を考察した。

4. 研究成果

本研究では、聞き取り調査より、地域アイデンティティのよすがとして、事実関係の記録ならびに生活や町の歴史などに関する「語り」があると位置づけた。ICT が発展して以降には、歴史などをアーカイピングする活動が多くおこなわれてきた。一方で、震災からの復興記録アーカイブにおいては、まずは大量のデータを、失われないうちに集めることが当初もっとも重要とされた。その後、利用場面の想定をすべきだと考えた事例がいくつかあり、それぞれが自治体職員の業務や学校での授業、被災地観光などを想定したシステムとして設計された。これらのアーカイブでは、「時間から探す」「位置情報から探す」といった機能・メニューが提供されている。

しかしながら、本研究でめざしたアーカイブは、業務上の必要性から積極的に地域情報アーカイブにアクセスする層を対象としたアーカイブではない。地域活動や地域への愛着のために地域情報を利用する地域住民を中心的ユーザーとして想定した。彼らの目的は各自の地域活動や日常生活であり、積極的に ICT の利用を意図するとはかぎらない。

そこで、積極的な ICT の利用者の外側に、間接的な使用を含め、結果的にアーカイブ上の情報にアクセスするユーザー像を想定し、アーカイブシステムを構築した。アーカイブシステムとは別の文脈にあるユーザーが、あらためてアーカイブを意識しなおさなくても、それぞれの文脈にあわせた情報を容易に取得できることを意図している。デジタル化された地域情報データは、明確な目的をもって検索して使用されるだけでなく、印刷資料に使用されたり、親密な集団あるいは個人で眺めるといった用途での役割も大きいと考えるためである。

アーカイブの基礎的なデータ表示には時系列を採用した。放送局のデータを使用しているからというだけでなく、地域情報一般が時間軸を持つためである。地理情報も必ず持つが、緊密な地域コミュニティとして想定されるエリアは市町村以下であり、地図をインターフェースの基軸とする方針は妥当ではないと判断した。

また、アーカイブに搭載するための放送記録等のデジタル化のプロセスで、放送記録ノート

を分析すれば、他の臨時災害放送局でも参照しうるコンテンツのモデルが提示可能であることがわかった。そこで、放送記録ノートの内容をカテゴリ化し、定量化した。この分析により、時期ごとの主たる放送内容の概略を描き、時系列による変遷を把握した。さらに、放送企画の意図、実施時期について、聞き取り調査をおこなった。単体のインタビューではなく、PC・インターネット関連ボランティアとして局内に立ち入りながら断続的に実施した。この聞き取り調査結果を放送記録の変遷と照合し、臨時災害放送局の地域メディアとしての位置づけを考察した。

その結果、災害が起きた直後・避難所生活が中心となる期間・復興への転換期・長期的な復興期において、それぞれどのような放送がおこなわれたかを示すことができた。従来の東日本大震災以前の臨時災害放送局の運営は数ヶ月から一年程度が標準的であり、大規模災害が起きた直後の「生きるための情報」を提供する役割を果たすものであった。本研究では放送記録の分析により、この「生きるための情報」の具体的な内容を示した。また、災害直後の混乱がやや落ち着き、「生きるための情報」がその役割を徐々に減らす中、コミュニティ内の人々の結合、ともに復興に向かう仲間としての意識の醸成のための情報が必要とされることを明らかにし、その具体的な内容を示した。さらに、復興期における合意形成のための議論の場としての機能を明らかにし、その具体的な内容を示した。

加えて、情緒的な連帯感の醸成のためのコンテンツが、実利的な(狭義の)「情報」とは異なる役割を果たしていたことをあきらかにした。被災直後から長期的な復興に至るまで、時期ごとの情緒的連帯のためのコンテンツの形式を示した。

この放送記録の分析に加え、聞き取り調査から、臨時災害放送局「りんごラジオ」が地域住民から他のメディアとはまったく別のものとしてとらえられていたことをあきらかにし、地域メディアとしての位置づけを論じた。災害時に報道されないことは生命と生活に直接影響するが、復興期の報道の不足は情緒的な見捨てられ感覚を強く醸成する。りんごラジオは、しばしば「私たちの」メディアとして語られた。地域内の事実を放送するのみならず、情緒を共にする機能を果たしたためであることが示唆された。災害と復興で増加する地域内の情報をまとめ、外部メディアにつなげるメディア・ハブとしての役割を果たしていた。復興期、被災地域から発信されるニュースの緊急性は相対的に低く、そのためにメディアに対して(ひいては他地域に対して)疎外感をおぼえやすいが、臨時災害放送局が他メディアへの窓口となり、それをおこなう役割があると結論づけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 2 件)

松本早野香、臨時災害放送局の記録を用いた地域アーカイブの構想、2015 年度社会情報学会大会、明治大学駿河台キャンパス、2015

松本早野香、小さなメディアの大きな力、平成 27 年度大妻女子大学社会情報学会総会、大妻女子大学多摩キャンパス、2015

〔図書〕(計 3 件)

横幹<知の統合>シリーズ編集委員会、ともに生きる地域コミュニティ 超スマート社会を目指して(横幹 知の統合 シリーズ)、吉田寛、服部哲、松本早野香「『思い出』をつなぐネットワークから Community 5.0 へ 宮城県山元町の復興支援活動より」、東京電機大学出版局、2018、144

吉原直樹 他 編、東日本大震災と 復興 の生活記録、松本早野香「地域に開かれ、地域から開かれた臨時災害放送局--山元町『りんごラジオ』」、六花出版、2017、780

松本早野香 他、Web 制作の技術: 企画から実装、運営まで(未来へつなぐデジタルシリーズ)、共立出版、2015、191

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年:

国内外の別:

取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
http://www.sis.otsuma.ac.jp/dept1/dept1_4/matsumoto/

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：高橋 厚
ローマ字氏名：Takahashi Atsushi

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。